

## 伝統の技術に、新しい価値観をプラスして、 地域循環型の本造建築業界を創造する。

建築業界の構造変化によって、日本の木造建築技術は過去のものになろうとしている。そこで若手の継承者を育て、国産木材と自然素材を使用し、地元の職人が家を建てるという地域循環型の本造建築技術の継承のための勉強会が始まった。

### デザインや数値的データを学ぶ機会がなかった職人たち。

以前の日本の住宅は木造建築が主流であり、そこでは地元の大工・左官・建具職人たちが活躍していた。しかし、彼らには技術はあっても、昨今のニーズに柔軟に対応するノウハウはもっていなかった。逆に次々と誕生したハウスメーカーはデザイン、安全への数値的な裏付け、プレゼ

ンテーション能力などを強みとしてユーザーに受け入れられ、徐々に建築業界の構造は変わっていった。それはまた、日本古来の木造建築技術の衰退をも意味する。

こうした事態に危機感を感じた若手の工務店経営者たちが、日本本来の地域循環型の建築市場を取り戻すため「地域主義工務店」の会を結成した。今、この会には全国の工務店から職人が集まり、勉強会や見学会を実施している。

この会の相談役であり、住まい関連の地球生活マガジン「チルチンびと」を出版している風土社の代表取締役編集長の山下武秀さんは、次のように語る。

「これまで職人たちは親方の作った家については習うことができましたが、他の家の技術については学ばせ

てした。まして、デザインや間取りと設計の関連性についてなど学ぶ場もありませんでした。これでは今の若いユーザーには相手にされません。この勉強会では、東京藝術大学や東北職業能力開発大学校などにも協力をいただき、かなり高度なノウハウや、数値的な裏付けを知ることができます」

現在この会は、全国対象セミナーが年6回、地方建築塾が各地域で年5回、専門建築塾が年に数回開催している。

この中で、従来木造建築では弱いと言われていた「耐震」面や、シックハウスの原因となる「化学物質」についても研究を重ね、国の基準をクリアする技術を修得した。職人たちはさまざまなノウハウを身につけて、自信を持ってお客様に提案できるようになったのである。

### 時代に即し、多くのメリットをもつ地域循環型建築。

この「地域主義工務店」の会がめざしているのは、地域循環型経済に則した建築業である。

つまり、国産の木材を使い、建具職人、家具職人、大工、左官などがそれぞれの技術を活かして家造りを行うという昔ながらの手法である。一見古く見えて、実は合理的な点が多い。

まず、工務店は施主から直接発注を受けるので中間マージンが生じず、経営に必要な利益をあげることができる。これによって地元の若者たちも安心して就職できるので、事業や技術の継承が可能になる。地元の林業も再生できる。これが地域循環型の意味である。



2010年9月9日に行われた茶道や茶室建築の講義

### 担当者より



他には真似できない  
AJOSCならではの  
助成でした。

風土社代表取締役  
編集長  
山下武秀さん

地域循環型の製造業の創造は、産業の空洞化と就職難にあえぐ今後の日本社会にとっても重要な課題です。その点にご理解くださり、今回の助成になったと考えます。他には真似できないAJOSCだけのご配慮に心より感謝申し上げます。

次にコスト面では、高い国産材を使ったとしても、それぞれの職人が持つ技術をいかして、ドアでも、建具でも必要なものを必要な時に作れば、在庫を抱える必要はなく建材コストは下がるのである。

「全体的にみてもハウスメーカー並かそれ以上のコストダウンがはかれます」と山下さんは語る。

ネックとなっていたデザイン面でも、各工務店がこの会で学んでノウハウを身につければ、画一的な住宅よりも、より個性的で住む人に適した住宅ができる。

「例えばユーザーから書斎が欲しいという要望があったとします。間取りとコスト的には無理だとしても、もう一歩つっこんでお話を聞くのです。そうすると、実は一人でのんびりできる空間が欲しいだけということもあります。それならば、ご提案できることもあるでしょう。地域主義工務店の会は、『家』というハードを作るのではなく、『住まい』というソフトを含めたご提案をしていきたいのです」

このページで紹介している住宅の写真はその一例だが、単なる「家」ではなく、「作品」に見えてくるのは、各職人たちがそうした思いをこめているからだろう。

同会は横のネットワークで結ばれ、各会員の交流や情報交換も盛んだ。また、工務店の二代目の30代の人たちが積極的に参加し、会を牽引し始めている。日本の伝統の技術が、新しい価値観を伴って継承され、具現化しようとしている。



新潟県の工務店が施工した木造の注文住宅